後川放水路が完成

流域のはん濫防止に 大きな期待

県が進めていた後川の放水路がこのほど完成し、七月十九日に国や県、市、地元関係者など約百人が出席して通水式やもち投げ、完成を祝う式典などが行われました。

後川は流域面積一四・五平方㌔、幹線流路一三㌔の物部川の支流です。流域は山地部分のほとんどない平坦地で旧物部川のはん濫源、河口は海岸砂丘にさえぎられ、東西に流路を変えて物部川の河口に注いでおり、流域は浸水の常襲地帯で大きな被害を受けてきました。これまでは本流と三つの放水路で放流していましたが、排水能力が小さく、後川の抜本的改修を機に昭和四十八年より後川と新秋田川の合流点の下流から直接海に放流するための放水路建設に着手。総事業費約六十億円をかけてこのほど幅約三六㍍、延長七五〇㍍の放水路と幅五三㍍、高さ一三・七㍍の放潮水門が完成しました。

この日神事の後関係者や地元の住民が見守るなか、防潮水門横で通水式が行われました。中内知事や小笠原市長ら六人が六基の水門を開けるボタンを一斉に押すと、水路にたまっていた水が渦を巻いて土佐湾に流れ出ました。

この放水路の完成によって、はん濫防止面積五五〇㌶、年平均二億二千五百万円の被害の減額などの効果が期待されています。

知事らが水門を開けるボタンを押した

長岡小Aが三連覇

第6回土長南国地区 わんぱく相撲大会

七月十日に南国市民体育館の相撲場で第六回土長南国地区わんぱく相撲大会が開かれ、四十二チーム、百二十六人のちびっこ力士が熱戦を繰り広げました。

これは、土長地区体育会（浜田一雄会長）の主催で毎年開かれているもので、今年は四年ぶりに南国市で開催。豆力士たちはお父さんやお母さんの声援を受け、土俵の上で元気いっぱい暴れまわりました。

結果は次のとおりです。

◪団体の部

第一位＝長岡小A（坂本貴司、松村信、矢野智久）▼第二位＝国府小A▼第三位＝稲生小A、大篠小A

◪個人戦

○四年生以下の部

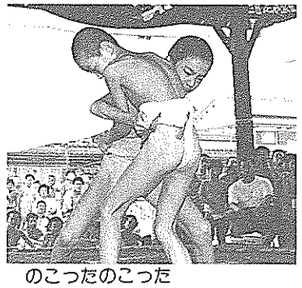
第一位＝三谷隆仁（稲生小A）▼第二位＝坂本貴司（長岡小A）▼第三位＝中町隆文（田井小B）、川田増巳（森小B）

○五年生の部

第一位＝松村信（長岡小A）▼第二位＝福重和生（稲生小A）▼第三位＝川田久志（森小A）、土居正登（稲生小B）

○六年生の部

第一位＝矢野智久（長岡小A）▼第二位＝竹内誠治（大篠小A）▼第三位＝大石純嗣（国府小A）、柳瀬裕（本川小B）


のこったのこった

流域住民三百五十人が物部川を清掃

○河川愛護月間○

河川愛護月間中の七月十七日に物部川の河川敷の清掃が行われ、流域の住民ら約三百五十人が参加しました。

毎年七月を河川愛護月間と定めて河川愛護思想の普及に努めていますが、今年から愛護月間中に「管内河川清掃日」を設けて行事を充実させ、愛護思想のよりいっそうの普及、啓蒙を図ることにしたもので、建設省高知工事事務所が主催して実施。

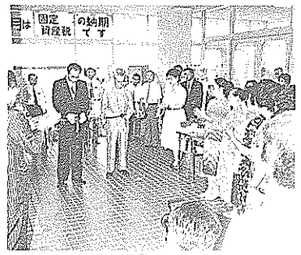
朝七時からごみ袋などを片手に流域の皆さんが清掃を開始。また、八時からは少年サッカーチームの子供たちも加わって九時まで河川敷の清掃に汗を流しました。

その後、河川敷のグラウンドで南国市や野市町、土佐山田町などの少年サッカーチームの試合が行われました。南国市からは三和など六チームが参加、優勝は逃したものの、元気いっぱいグラウンドを走り回っていました。

早朝から河川敷を清掃

防ごう非行 助けよう立ち直り

パネル展や展示即売会を開催



市長らがテープカット

社会を明るくする運動の一環として、七月十五日に市役所でパネル展や高知刑務所作業製品の展示即売などが行われました。

毎年七月に行われている社会を明るくする運動は昭和二十四年に施行された「犯罪者予防更正法」をきっかけに昭和二十六年から始まったもので、今年で三十八回目。「すべての国民が、犯罪の防止と罪を犯した人たちの更正について理解を深め、力を合わせて犯罪のない明るい社会を築こう」と、少年の非行防止と更正に重点を置いて全国で地道な活動が続けられています。

この日は九時に市長らがテープカット。午前中は一階ロビーで交通事故や覚醒剤のパネル展や薬物乱用防止啓発ビデオの上映、展示即売などが行われ、大勢の市民がつめかけました。また、青少年や婦人の悩みごと相談所も開設され、保護司会の皆さんらが相談に応じていました。

一時からは保護司会やBBS、更生保護婦人会など約三十人が後免町商店街でパレード、買物客にちらしやうちわなどを配りました。また、市役所では事例研修も行われ、「防ごう非行、助けよう立ち直り」をテーマに運動を繰り広げました。

非行防止は家庭から

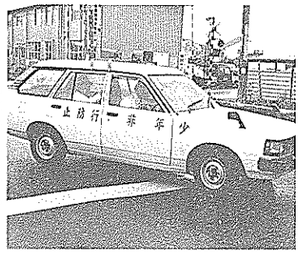
十四団体四十人が市内をパレード

七月十四日、青少年を非行からまもる全国強調月間の活動の一環として南国市保護司会など十四団体から約四十人が非行防止を呼び掛けて市内をパレードしました。

毎年長い夏休みに入るこの時期は開放感から子供たちの心がゆるみ、非行に走りがちなとき。また、朝から晩まで親と子が接し、非行防止に家庭が重要な役割を持つ時期でもあります。このため毎年七月を「青少年を非行からまもる全国強調月間」に定め、非行防止を呼び掛けています。

この日は一時に南国市補導委員や更生保護婦人会の皆さんが市役所に集合。まず「いじめテレホン相談」でおなじみの鴎田道代さんが講演。

その後南北二コースに分かれて「うちの子、よその子を問わず愛の一声を」と呼び掛けながら市内をパレードしました。



非行防止の啓発に向かう広報車

あゆみ いつまでも心配なの

家庭教育専任講師　田植　静代

東京に旅行中、ある友人宅に一泊させていただいたときのその友人（母親）と息子さんの会話のお話です。

息子さんはある一流の大学に通学されています。野球のクラブに入って、いつも試合だの練習だので帰宅が遅くなるそうです。

「ただいま」

「○ちゃんお帰りなさい。今日はとても暑かったので疲れたでしょ。」

「汗びしょびしょになっちゃった。」

「今日は、シャワーだけではだめですよ。おふろに入りなさい。おふろに入ったら、耳の裏も中もよく洗うのですよ。」

「いやだな、めんどうくさいよ。」

「だめだめ、もうシャワーだけで何日も入っていないじゃないの。」

「お母さん、耳の裏洗ってくれる。洗ってくれるなら入るけれど。」

息子さんは、東京のある有名な一流大学の学生さん、体もたくましく成長され、立派な大人なのです。

けれど何かおかしいなと思われませんか。お母さんが小さいときからあまりにも大事に大事に育てすぎて、それがいまだに尾を引いているようですね。

さとるちゃんは五才のとても元気な男の子です。すべての行動が積極的で、なんでも自分一人でやりたいのです。

「お母さん、今日は僕一人でおふろに入りたいの。」

「だめだめ、あんた一人で入らしたら、お湯で遊んでばかりいて、きれいに洗わないでしょ。」

「僕きれいに洗うよ、ね、お耳のうしろも中もちゃんと洗うからね、一人で入っていいでしょ。」

「いけません。もう少ししたら、お母さんが入るから、それまで待っていてちょうだい。」

さとるくんのお母さんは、おふろだけではありません。さとるくんのすることなすことすべてが心配で安心できないのです。子どもに大人並みの完璧を求めるからです。だからいつも、さとるくんの行動はブレーキがかけられてしまって伸びようとする力が抑えられています。このことをお母さんは気がついておられないのです。

大学生になっても、お母さんの助けを受けないと、おふろに入れない子に育ってしまう方が大変ですよ。